

今週の為替相場見通し(2021年7月19日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		109.72 ~ 110.70	110.08	109.00 ~ 111.00
ユーロ	(ドル)		1.1772 ~ 1.1884	1.1805	1.1750 ~ 1.1900
(1ユーロ=)	(円)		129.64 ~ 131.08	129.92	128.00 ~ 131.50
英ポンド	(ドル)		1.3760 ~ 1.3911	1.3764	1.3700 ~ 1.3900
(1英ポンド=)	(円)	*	151.43 ~ 153.49	151.55	150.00 ~ 153.50
豪ドル	(ドル)		0.7393 ~ 0.7503	0.7401	0.7300 ~ 0.7450
(1豪ドル=)	(円)	*	81.35 ~ 82.82	81.44	80.30 ~ 82.50

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 山口 朋子

(1) 今週の予想レンジ: 109.00 ~ 111.00 円

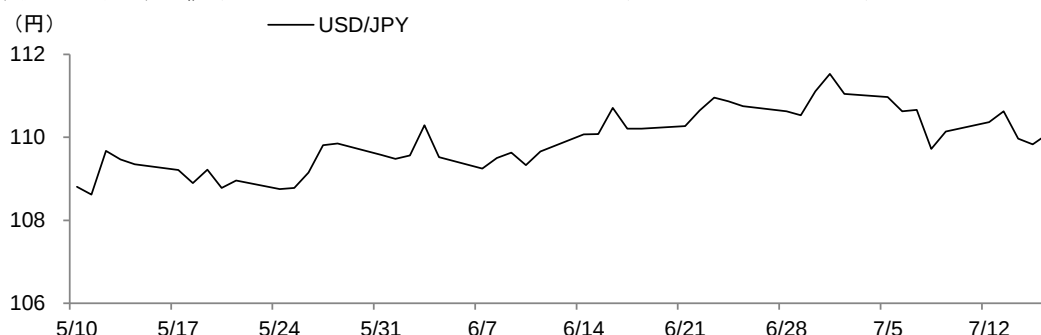
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は横ばい推移。週初12日、110円台前半でオープンしたドル/円は一時109円台に下落するも、米主要3指数が揃って市場最高値を更新する展開にドル買いが優勢となり、ドル/円は110.40円まで上昇。翌13日も日経平均が続伸し、さらに外需回復持続を受け中国の経済指標が堅調となる中クロス円に買いが入ると、ドル/円は続伸。海外時間に発表された米6月消費者物価指数(CPI)およびコアCPIが予想比強めの結果となると、ドル/円は110.60円台まで上昇。米テーパリングの観測の再燃とそれに伴う米長期金利の上昇を背景に翌14日の東京時間にドル/円は110.70円と週高値を付けた。ただし、海外時間にパウエルFRB議長が議会証言でハト派な発言をすると、米金利は低下し、ドル/円も下落に転じた。15日もドル売りの流れが継続すると109.72円と週安値を付けた。16日に発表された米6月小売売上高が予想外のプラスとなるとドル/円は110円台を回復し、週初と同水準で越週した。

今週のドル/円は引き続きレンジ推移で推移すると予想する。先週発表された米6月CPIは前年同月比5.4%上昇と、約13年ぶりの大幅な伸びを記録。さらに米6月卸売物価指数は前年同月比7.3%上昇と、こちらも10年半ぶりの大幅な伸びとなっている。堅調な経済指標が続いているものの14日、15日のパウエルFRB議長による議会証言では、「景気回復が完了するまで」、FRBは金融政策を通じて経済に「強力な支援」を提供すると表明し、ハト派スタンスを維持した。労働市場については、全体の労働参加率も低迷が続いていると指摘し、望ましく進展していると判断するには「なお程遠い」と強調。発言を受け米10年債利回りは1.3%割れまで低下しており、ドル/円の上値を押さええている。今週から7月27(火)-28日(水)のFOMCを控えたブラックアウト期間に入るためFed高官発言の予定がなく、ドルは動きにくい展開となるだろう。また、週後半から日本はオリンピックのため休場となり、参加者が少ない中動意に乏しい展開と予想。注意したいのは世界での新型コロナウイルス感染者の増加である。再びリスク回避の動きが強まると、円買いが加速し、109円台前半まで一気に円高が進む可能性もあろう。注目の経済指標は20日(火)の米6月住宅着工件数、22日(木)の新規失業保険申請件数、米6月中古住宅販売件数である。

(3) 先週までの相場の推移

先週(7/12~7/16)の値動き: 安値 109.72 円 高値 110.70 円 終値 110.08 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 原田 和忠

(1) 今週の予想レンジ: 1.1750 ~ 1.1900 128.00 ~ 131.50 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は、軟調地合いとなった。週初12日、1.1870付近でオープンしたユーロ/ドルは、デギンドスECB副総裁が量的緩和縮小に対し慎重な姿勢であることが伝わり、ユーロ売りが加速すると、1.18台前半まで下落。一巡後は、ポジション調整の動きから1.18台半ばまで反発したが、その後は方向感に乏しい展開となった。13日、ユーロ/ドルは、1.18台半ばでの小動きだったが、海外時間に入り、米6月CPIの結果を受けたドル買いに1.18台を割り込み、一時週安値の1.1772まで下落した。14日、ユーロ/ドルは、1.17台後半を推移したが、パウエルFRB議長のハト派的な議会証言や米長期金利の軟調推移にドル売りが加速し、1.18台前半まで値を戻した。15日は、ドルの軟調推移を受けて1.18台半ばで推移していたが、後半にかけてはドル売りが強まって一時1.18を割り込み、その後も上値重く推移した。16日は、米小売売上高結果を受けてドルが買われる中、ユーロ/ドルは上値重く推移し1.1805で越週した。

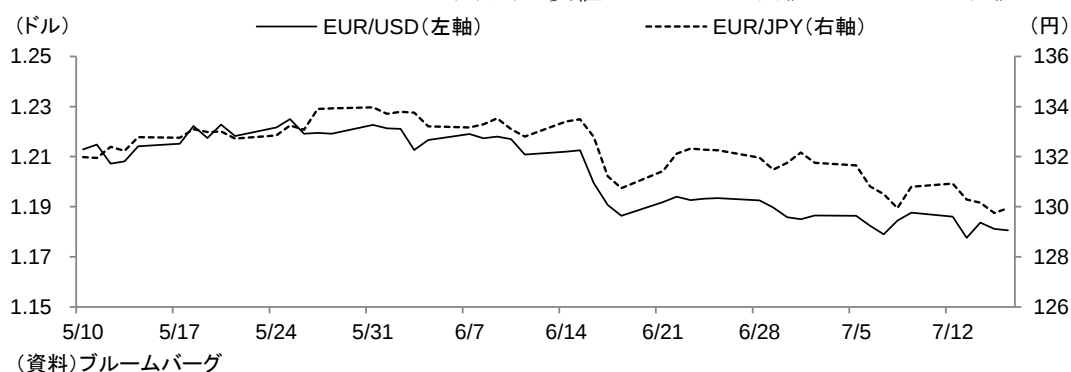
今週のユーロ/ドル相場は上値の重い推移を予想。22日(木)にECB政策理事会を控える中、週前半は動意の薄い相場となりそう。ECB政策理事会では、金融政策据え置きが予想されており、預金ファシリティ金利などの政策金利やPEPPなどの量的緩和について、基本姿勢は維持しよう。一方で、ラガルドECB総裁がすでに言及している通り、フォワードガイダンスについては、よりハト派な修正がなされる公算だ。また、PEPPについては、22年3月以降新たなフォーマットへの移行が行われるという発言も見られており、量的緩和政策の変更について具体的な発言があるかも注目される。かかる中、ハト派色が強くなったECBを確認する形で、ユーロ買いの材料は少なくなっている。対し、ワクチンが普及し経済活動が再開している米国において、長期的なインフレ期待が薄れ、米金利の上昇しない状況下ではドル買い要因もまた薄れている。総じていえば、7月初からのレンジ推移が継続すると予想される。

(3) 先週までの相場の推移

先週(7/12~7/16)の値動き:

(対ドル) 安値 1.1772 高値 1.1884 終値 1.1805

(対円) 安値 129.64 高値 131.08 終値 129.92



3. 英ポンド

欧州資金部 野原 龍一

(1) 今週の予想レンジ: 1.3700 ~ 1.3900 150.00 ~ 153.50 円

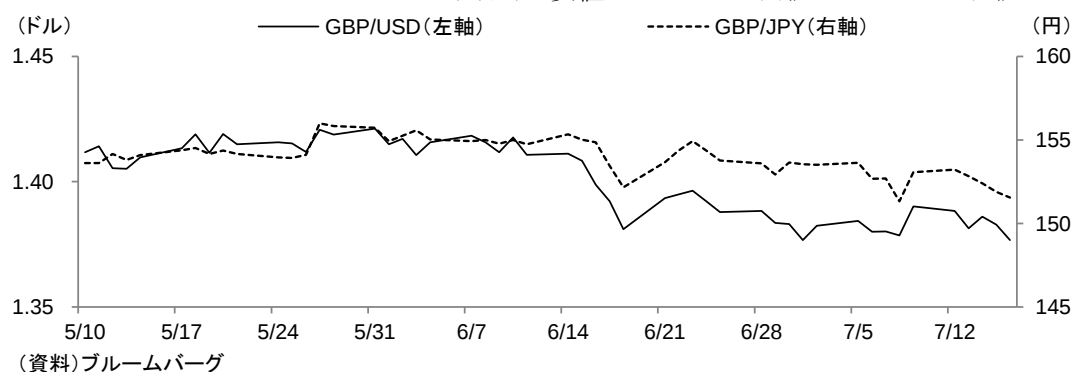
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は方向感の乏しい値動き。7/12(月)は1.38台後半でスタートするも、ロンドン時間に入り英国での新型コロナウイルス感染者増加を嫌気し1.3850割れまでじりじりと売られる展開。その後、1.39台へと再度戻すも米6月CPIを控えて前日の高値近辺では売りが優勢。7/13(火)、米6月CPIは予想対比大幅に強い数字となり米金利上昇、ドル買いで反応、英ポンドは1.3850から1.38まで下落。ただし、翌日のパウエルFRB議長議会証言を控えてドル買いのフォロースルーは限定的となり1.38-1.3850の狭いレンジ内での値動き。7/14(水)、ロンドン朝に発表された英CPIは前月比+0.5%、前年比+2.5%と2018年8月以来の高水準となり英ポンドは1.3820台から1.3870台まで上昇。その後、パウエル議長議会証言のテキストがハト派な内容であったことを受けてドル売りの流れに1.3890台まで上昇するも、1.39台に向けた上値の重さが継続し1.3850割れへと下押し。7/15(木)、英雇用指標は雇用者数・賃金指標ともに予想をやや上回る水準ながら1.3850台から1.3820割れまで下落。その後、BOEソーンダース議員より、物価が予想以上のペースで増加しているため、国債買い入れプログラムを早期に中止する可能性があり、今後1-2か月のうちにBOE会合で買い入れ減額の検討がされるだろうとの発言。想定以上のタカ派なスタンスに英ポンドは1.39手前まで買われるも再び1.39はレジスタンスとして機能し売りが優勢。その後、北米時間は全体的なクロス円売り地合いのなか英ポンド円の売りが主導し英ポンドは1.38割れ手前の水準まで売られる展開。7/16(金)、ロンドン朝方に1.3860台まで急進する場面も見られたが、その後は英国内新規感染者数が1月以来の5万人を突破したこともあり対ドル、対ユーロで断続的な英ポンド売りが継続し1.38を割れてクローズ。

今週のポンドは引き続き方向感の出づらいつ展開を予想。7/23(金)に英小売・PMIを控えるも先週に比べ指標に乏しく、BOE委員からの目立った発言も予定されていない状況のなか英ポンドはトレンドの出づらいつ地合い。リスク材料としてはロックダウン解除後のコロナ新規感染者の増加が懸念され、日々新規感染者数には神経質な展開が継続すると思われるが、成人の2回目ワクチン接種率が7割近い現状に鑑みると、足元は英ポンドに対する悲観的な見方は限定的であると思われ、先週末は1.38を割れて弱含む展開ながら1.37台では押し目買い優勢な展開を予想。特に、ソーンダース委員からの発言にあったように堅調なインフレ、雇用環境を背景にBOEが政策変更へ踏み込む重要な転換点にあると思われ、マーケットが早期の国債買い入れプログラム縮小を織り込む余地はあり、英ポンドは上昇のタイミングを探る時期にあると考える。ドルを取り巻く環境として、パウエル議長の議会証言における直近の発言からもFedが急激に政策変更へ舵を切ることとは想定しづらく、先月以降継続するドル買いポジションの巻き戻しには注意が必要。また、先週は対ユーロで0.85割れを失敗しショートカバーが見られたが、BOE、ECBの政策スタンスの相違から0.86台では対ユーロでの押し目買いが優勢であると考え。一方で、翌週にFOMCを控えて大きくトレンドが出る地合いにはないと思われ、英ポンドのレンジは1.37-1.39を予想。

(3) 先週までの相場の推移

先週(7/12~7/16)の値動き: (対ドル) 安値 1.3760 高値 1.3911 終値 1.3764
(対円) 安値 151.43 高値 153.49 終値 151.55



4. 豪ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 玉井 美季子

(1) 今週の予想レンジ: 0.7300 ~ 0.7450 80.30 ~ 82.50 円

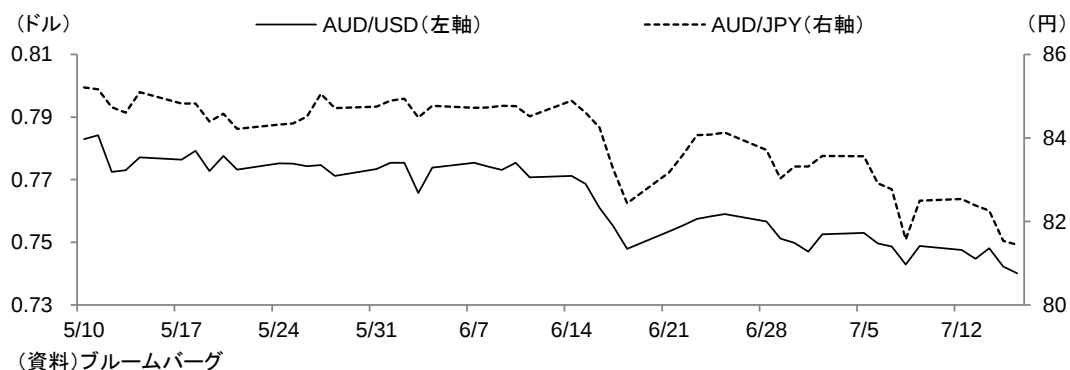
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは上値の重い展開。12日、0.7489でスタートした豪ドルは新型コロナウイルスの感染拡大を受けロックダウンが延期される見通しの中、じりじりと下落。米国時間に入り、先週のリスクオフムードからの巻き戻しの動き優勢となり、豪ドルも上昇に転じたものの、0.7500を目前に跳ね返された。13日は中国6月貿易収支が予想を上回り週高値となる0.7503をつけたものの直ぐに0.74台へ回帰。米国時間では米6月消費者物価指数(CPI)が予想を大きく上回る結果にドル買いが強まり豪ドルは0.7430近辺まで急速に下落した。その後下げ幅を縮小したものの、米金利が再び上昇する動きに0.74台半ばでの推移となった。14日は前日の流れを引き継ぎ序盤は軟調に推移したものの、強い豪7月消費者信頼感指数の結果やRBNZが政策決定会合にて、大規模資産買い入れプログラム(LSAP)に基づく追加資産購入を来週23日まで停止することを発表すると、早期利上げ観測からNZDが大きく買い進まれる展開に、豪ドルも連れ高に。さらにパウエルFRB議長による議会証言の原稿内容が発表されると、予想以上にハト派な内容にドル売りが強まり、豪ドルは0.7480近辺まで上昇した。15日、豪6月雇用統計は予想以上に改善したものの、0.75台には乗せられず。米国時間にはパウエルFRB議長が前日の下院議会証言に引き続き慎重姿勢を繰り返し、米債利回りは低下し、米株も下落。豪ドルも重く推移し、0.7410近辺まで下落した。16日は第二四半期のニュージーランドCPIが市場予想を上回ったことで上昇したものの、海外時間には米小売売上高が市場予想を大きく上回ったこともありドル買い優勢に転じた。週安値となる0.7393まで下落し0.7401でクローズした。

今週の豪ドルは上値の重い動きを予想する。豪州では新型コロナウイルスの感染が拡大しており、シドニー・メルボルンで人口の4割が対象となるロックダウンが続いている。感染拡大が止まらない場合は制限強化の可能性もあるとされており、豪ドルは上値の重い動きとなりそうだ。また原油については、先週サウジアラビアとUAEがUAEの原油生産量を増加することで合意したと伝えられ、原油価格は下落した。OPEC+はまだ日程も決まっておらず合意できるか不明だが、増産懸念が強まれば原油価格の下落が豪ドルの重しとなるだろう。一方、ニュージーランドでは量的緩和を停止することを発表したほか、16日発表されたCPIが中央銀行の目標を上回り、早期利上げ観測が高まっている。NZDの上昇が豪ドルの支えとなる場面もありそうだが、今週は目立った指標の発表もないことから影響は限定的と考える。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(7/12~7/16)の値動き: (対ドル) 安値 0.7393 高値 0.7503 終値 0.7401
(対円) 安値 81.35 高値 82.82 終値 81.44



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。